

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520338

研究課題名(和文)

現代中国語における空間認識に関する体系的研究

研究課題名(英文)

A Systematic Study of Spatial Perception in Modern Chinese

研究代表者：

丸尾 誠 (MARUO MAKOTO)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：10303588

研究成果の概要(和文)：

現代中国語における空間表現に関する各種文法研究のテーマの中で、発話者の認識というものが最も顕著に反映された文法事象の1つに「方向補語の派生義」が挙げられる。本研究課題では、その派生義の分析を中心に、主に方向補語の各種用法に関する体系的な解釈の構築を試みた。本研究にみられるような「言語と認知」との関連という視点からのアプローチは、他の個別の方向補語の各種用法を関連付けていくのにも有効に作用するものと思われる。

研究成果の概要(英文)：

Among the numerous subjects of grammatical research on spatial expressions in Modern Chinese, one of the most remarkable which reflects speakers' cognition is the so-called "extended meaning of directional complements". The aim of the present study has been to produce a systematic interpretation of some of the main usages of directional complements through a detailed analysis of such extended meanings. In addition, the cognitive approach that was adopted in this study has proved effective in clarifying the relationships between the various usages of different directional complements.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：現代中国語文法

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語 移動動詞 空間認識 方向補語 現代中国語文法

1. 研究開始当初の背景

報告者(丸尾)はこれまで、文中で中心的役割を果たす動詞の中でもとりわけ人間の

認識が反映されやすい「移動動詞」(例：走[歩く]、来[来る]など)の用法分析を中心に、現代中国語の文法研究に取り組んできた。移動表現については、当該の事態を如何

に把握し言語化するかという点で各言語によって興味深い差がみられる。

前研究課題である平成16年～18年度科学研究費補助金(若手研究(B))「現代中国語の空間表現についての研究:日本語・英語との対照を視野に入れて」(研究代表者:丸尾誠)では対照研究をも視野に入れたうえで、考察対象を「仕手の移動」に加えて「受け手の移動」、さらには「存在を表す形式」をも含めた「空間表現」という枠にまで広げて論じた。

2. 研究の目的

上(「1. 研究開始当初の背景」の欄)に述べた一連の研究を背景に、本研究では、「移動表現」「空間表現」に関する丸尾のこれまでの研究をさらに体系的に発展させることを念頭に、従来の先行研究において多くみられた個別的な事象の指摘にとどまらない「言語と認知との関連」という立場から、中国人の空間認識の言語事象への反映について、より合理的かつ包括的な解釈を目指すことを目的とした。

また、視覚的な空間認識に加えて、メタファー、アスペクトなどより抽象的あるいは文法化された概念まで考察の対象に加えることによって、より多角的な角度からの分析が可能となり、中国語という言語の本質的な機能の解明につながるものと考えられる。

3. 研究の方法

本研究は言語研究を基盤としているが故に、大量のコーパスを収集したうえで、それらを分析していくことになる。この作業は、理論と言語事実を結び付け、その理論の妥当性を証明していくうえで欠くことができない。そして、上記「2. 研究の目的」欄で述べたような問題を考える際には、統語的な分析の枠を超えて中国人の認識をも考慮して考察する必要があることから、実証的な検証を通して理論を構築していく過程において、随時インフォーマントによるチェックを受けた(研究補助として、各年度、中国語大学院生1名を雇用した)。また学会や研究会での成果発表を通して、より多くの研究者からのコメントを受けたうえで、論を修正・発展させながら複数の論文を作成した。

4. 研究成果

方位詞・介詞の用法や移動動詞と場所目的語の意味関係をはじめとする中国語における空間表現に関する各種文法研究のテーマ

の中で、発話者の認識というものが最も顕著に反映された文法事象の1つに移動概念を転用した「方向補語の派生義」が挙げられる。本研究課題ではその派生義の分析を中心に、主に方向補語の各種用法に関する体系的な解釈の構築を試みた。以下、研究成果である各論文の要旨を(1)～(6)に分けて述べる。

(1) 空間義から時間義への意味拡張は多くの言語において広くみられる現象であり、補語“起来”に関しては着眼点が起点からの離脱にあることが時間的な始まり、即ち開始義とリンクする動機付けとなっている。論文「中国語における「開始義」について—方向補語“起来”の用法を中心に—」では、“起来”の代表的な派生的用法である「～し始める」という開始義およびその周縁的な用法(評価・見積もり、事態の意外性など)について考察し、アスペクトに関わる意味が、モダリティに転用される状況について述べた。

(2) 論文「現代中国語の補語“起来”について」では、補語“起来”の表す文法的意味について、劉月華主編1998.《趨向補語通釈》(北京語言文化大学出版社)にみられる「方向義」「結果義」「状態義」の3つの分類の間に内在する関連性に言及しつつ、考察を試みた。そして“起来”の表すいわゆる集中義が想起させる「形成」という概念が、「結果義」に混在する各種意味においてどのような形で実現・認識されるのかについて述べた。

(3) 日本人にとっては一見移動とは関わりをもたないように思われる行為、事象、状態変化などに対しても、中国語では方向補語を用いて表すケースが非常に多くみられる。論文「現代中国語にみられる空間認識」はそうした用法に反映される中国人の空間認識の諸相について論じたものである。論文では、方向補語の派生義は一定の基本的枠組みに基づいて派生したものであるという推測をもとに、現代中国語にみられる空間認識の複雑さを、日本語との対照も考慮しつつ、認知的アプローチで解明することを試みた。

(4) 補語“進(来/去)”には他の方向補語の場合にみられるような抽象義への意味拡張はみられないものの、とりわけ“V進(来/去)”形式(Vは動詞)を他動詞表現で用いた場合、それが必ずしも動作の対象の位置変化を伴う物理的な空間移動を表す事象に限られるものではないことに加え、当該フレーズを構成する語の間にみられる複数の意味的・統語的要因により、日本人学習者にとって決して理解が容易であるものとは言い難い。論文「中国語の動補構造“V進(来/去)”について」では、その要因の中でも特

にVと補語“進(来/去)”の間にみられる動
作の発生順序に関する複数の意味関係に着
目したうえで、“V 進(来/去)”形式の他動
詞的用法を中心に考察した。

(5) 論文「中国語の方向補語“出(来/去)”
の表す意味」では補語“出”の反義語である
“進”[入る]がいわゆる派生義の用法に乏
しいのとは対照的に、「結果義」をその主な
用法として有する“出(来/去)”の表す意
味について、それらと結びつく動詞の意味特
徴に基づいて考察を試みた。考察の過程にお
いて、“賣出”および“買進”の組み合わせ
に比して使用頻度が低い動補フレーズ“買
出”の用法を特に取り上げ、それに関連する
周辺的な文法事象についてもあわせて論じ
た。

(6) 中国語の方向補語は、最も基本的か
つ不可欠な文法事項の1つであり、ほとん
どの初級テキストでも扱われている。しかしな
がら、スペースの制約もあって、テキストで
は方向補語の組み合わせのパターン、および
主体の移動を表す典型例といったもののみ
が示されるケースも少なくない。とりわけ対
象の移動を表すケースなどは、実際に使いこ
なすのは容易ではない。論文「中国語の方向
補語について — 日本人学習者にとって分
かりにくい点」では、そうした方向補語の各
種用法について、日中対照という観点から日
本人学習者にとって分かりにくい点を整理
したうえで、その要因を分析した。

さらに中国語教育の現場への研究成果の
還元を目指して、本研究課題における成果の
一部を中国語テキスト(共著)や文法書(『基
礎から発展まで よくわかる中国語文法』,
アスク出版, 2010年 単著)の執筆にも反
映させた。

上記に記した以外に、2010年に中国(瀋
陽と大連)で行った2件の口頭発表([学会
発表]欄の③②参照)に基づき論文(日本人
学習傾向補語的難点)(査読有)および「中
国語の方向補語をめぐる問題 — 教授法に
ついて考える」(査読無)を執筆し、いずれ
も掲載が決まっている(ただし掲載予定の論
文集の出版日については未定であるため、下
記「5. 主な発表論文等 [雑誌論文]」の欄に
は記載せず。原稿は既に提出済み)。

こうした本研究課題の一連の研究成果に
ついては報告書

『現代中国語における空間認識に関する
体系的な研究』(全96ページ)

として冊子にまとめた(ただし上記のような
事情により、《日本人学習傾向補語的難点》
および「中国語の方向補語をめぐる問題 —
教授法について考える」の2本の論文につい

ては未収録)。

本研究にみられるような視点からのアプ
ローチは、個別の方向補語の用法を相互に關
連付けていくのにも有効に作用するものと
思われる。今回取り扱うことのできなかった
“上、下”類に関しては各種方向補語の中
で中核的な位置を占めることに加え、とりわけ
派生義に富んでおり、その分析は容易ではな
い。しかしながら、この2類までをも同様の
手法を用いた考察の対象に取り込むことによ
って「中国語の方向補語に関する研究」と
いう大きなテーマに昇華しうることもあり、
今回の研究課題を足掛かりに、今後は残りの
語・フレーズを含めた方向補語、ひいては結
果補語まで含めた補語全体の用法に関する
体系的な解釈の構築に努めていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計6件)

- ①丸尾誠「中国語の方向補語について — 日
本人学習者にとって分かりにくい点」、『言
語文化論集』第32巻 第2号, 名古屋大学
大学院国際言語文化研究科, 2011, pp.77
—89, 査読無
- ②丸尾誠「中国語の方向補語“出(来/去)”
の表す意味」、『日中言語対照研究論集』第
12号, 日中対照言語学会(白帝社), 2010,
pp.91—106, 査読有
- ③丸尾誠「中国語の動補構造“V 進(来/去)”
について」、『日中言語対照研究論集』第11
号, 日中対照言語学会(白帝社), 2009,
pp.1—15, 査読有
- ④丸尾誠「現代中国語にみられる空間認識」,
『言語』7月号「特集 ことばと空間」(第
37巻 第7号), 大修館書店, 2008, pp.64
—69, 査読無
- ⑤丸尾誠「現代中国語の補語“起来”につい

て」, 『日中言語対照研究論集』第 10 号,
日中対照言語学会 (白帝社), 2008, pp.31
-43, 査読有

- ⑥丸尾誠「中国語における「開始義」につい
て — 方向補語“起来”の用法を中心
に」, 『言語文化論集』第 29 卷 第 2 号, 名
古屋大学大学院国際言語文化研究科, 2008,
pp.347-360, 査読無

[学会発表] (計 7 件)

- ①丸尾誠「中国語の動補構造“V 回(来/去)”
について」, 2010 年度日本中国語学会東海
支部例会, 2010 年 11 月 27 日 (土), 名古
屋大学

- ②丸尾誠「中国語の方向補語をめぐる問題
— 日本語との対照から」, 第 4 回 中・日・
韓日本言語文化研究国際フォーラム, パネ
ルディスカッション I 「大学院における言
語・文化教育の新展開」, 2010 年 10 月 24
日 (日), 大連大学 (中国大連)

- ③丸尾誠〈日本人学習趨向補語的難点〉, 第
十届国際漢語教学研討会, 2010 年 8 月 19
日 (木), 遼寧友誼賓館 (中国瀋陽)

- ④丸尾誠「中国語の方向補語について — 日
本人学習者にとって分かりにくい点」, 中
国語話者のための日本語教育研究会 第 14
回研究会, 2009 年 12 月 19 日 (土), 名古
屋大学

- ⑤丸尾誠「中国語の方向補語“出”の表す意
味 — “買出”を例として」, 中国語教育学
会 第 7 回全国大会, 2009 年 6 月 7 日 (日),
愛知大学 (豊橋校舎)

- ⑥丸尾誠「中国語の動補構造“V 進(来/去)”
について」, 中国語教育学会 第 6 回全国大
会, 2008 年 6 月 8 日 (日), 北九州市立大
学 (北方キャンパス)

- ⑦丸尾誠「現代中国語の補語“起来”につい
て」, 日本中国語学会 東海支部例会 (創立
十周年記念特別企画), 2007 年 10 月 6 日
(土), 愛知大学 (車道校舎)

[その他]
ホームページ等

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/32-2/maruo.pdf>

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/29-2/maruo.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸尾 誠 (MARUO MAKOTO)
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授
研究者番号: 10303588

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし